

## 日本語版 Emotion Regulation Checklist の作成

松井 杏樹<sup>1</sup>・清水 寿代<sup>1</sup>

### Japanese validation of the Emotion Regulation Checklist (ERC) in preschool children.

Anju MATSUI<sup>1</sup>, Hisayo SHIMIZU<sup>1</sup>

**Abstract:** Emotion regulation is one of the most important factors in child development. However, it is a complex construct, few validated instruments are available to assess children. The main purpose of this study was to test the factor structure of the Emotion Regulation Checklist (ERC) in a sample of Japanese children. A total of 197 mothers (46% girls) completed the ERC. Although this scale has been validated in diverse cultural contexts, no study has analyzed its psychometric properties in a Japanese sample. Using structural equation modeling to examine the internal structure, we found that the original two-dimensional model fit the data from preschool children well. The reliability of the ERC subscales was 0.75 for ER and 0.84 for L/N. Additionally, we investigated the relationship between the ERC and children's problem behavior. L/N was positively and significantly correlated with problem behaviors. These findings provide some support for the use of the Japanese parent version of the ERC with young children.

**Key words:** emotion regulation checklist, Japanese version, parent report, validation

### 目 的

就学前の時期は、子どもたちが感情調節能力を発達させる上で重要な時期である(Harrington et al., 2020)。感情調節は、複数の定義がある複雑な概念であるが(Brumariu, 2015)、本研究においては感情調節を「自分の環境との最適なかかわりのレベルが達成されるために、自分の感情的な覚醒を効果的に調整する個人の能力」と定義する(Cicchetti et al., 1991)。

感情調節は、適応的な発達と不適応的な発達の経路の両方を研究することが必要という主張から(Cicchetti, 1993), Shields & Cicchetti (1997)は、感情調節能力を区別できる2つの要素は、適応的な感情調節と感情の否定性・不安定性からなると概念化している。感情調節の高さは、学校の適応や内化問題の少なさに関連してい

る(Bailey et al., 2016; Eisenberg et al., 2010)。また、感情調節の否定性は、外化問題に影響があることが明らかにされている(Blanton et al., 2010)。他にも、感情調節は、学業成績を予測することや(Trentacosta & Izard, 2007)、攻撃性をかなり予測(Soydan & Akalin, 2023)すると言われている。

これらのことから、子どもの感情調節の高さと子どもの感情の否定性・不安定性は、子どもの発達に大きな影響を与え得ると言える。感情調節はリスクのある子どものレジリエンスを促進する保護因子としても知られているが、感情調節の発達のためのサポートを子どもに提供する方法については、まだ明らかにされていない(Noroña-Zhou & Tung, 2021)。

感情調節の発達には生物学的要因と環境要因の2つがあると言われており、生物学的要因では神経生理学的要因、環境要因では文化や親の社会化が重要な決定要因だと言われており、そ

1 広島大学人間社会科学研究所

の中でも子どもの感情調節能力の発達は、特に、親からの影響が強いと言われている (Zeman et al., 2006)。

子どもの感情調節能力を測定する際の課題は、その測定方法である (Cole, Martin, & Dennis, 2004)。日本において、子どもの感情調節を測定する方法には、面接調査などで測定することはある (鹿島, 2020)。また、感情調節を測定する尺度として感情調節尺度が存在するが (吉津他, 2013)、成人期以降を対象にしており、就学前の感情調節を測定する質問紙が日本には存在しない。

海外では、未就学児の感情調節を測定する方法として Emotion Regulation Checklist (以下、ERC) を使用している。ERC は、「感情調節」と「子どもの否定性・不安定性」から構成されている。「感情調節」は、「状況に応じた適切な感情表示・共感・感情的自己認識」を示し、8項目から構成されている (Shields & Cicchetti, 1997)。また、「子どもの否定性・不安定性」は、「柔軟性の欠如、気分的能力、調節困難な否定的感情」を示し、15項目から構成されている。ERC は、Shields & Cicchetti (1997) が、6歳～12歳の子どもを対象に作成した質問紙である。その後、9カ国以上で翻訳され、信頼性や妥当性の検討が行われている。そして、子どもの感情調節を測定する際には、多く使用されている。近年は、6歳～12歳に限らず、3歳～6歳の未就学児を対象にして検討されているものもある (Molina et al., 2014; Nader-Grosbois, & Mazzone, 2015)。ERC は、アジアでも未就学児の感情調節を測定する質問紙として多く使用されている。

幼児の感情調節を測定する質問紙を作ることには、感情調節の発達が、子どもの問題行動や発達に影響することを考えると、今後の子どもの発達をアセスメントするうえで重要であると考えられる。

そこで本研究では、ERC の日本語版を作成し、因子構造と内的整合性を検討する。また、構成概念妥当性を検証するために子どもの情緒の問題や問題行動・社会的行動との関連を検討する。

## 方法

### 参加者

クラウドソーシングサービス「クラウドワークス」で参加者を募集した。3～6歳を持つ子どもの母親200名が回答し、回答に不備があっ

たものを除き、最終的に197名を分析に用いた。

母親の平均年齢は36.52歳で、SD=5.17であった。母親の就業形態は、フルタイム39名 (20%)、契約社員14名 (7%)、パートアルバイト36名 (18%)、専業主婦95名 (48%)、自営業13名 (7%) であった。母親の最終学歴は、中学校2名 (1%)、高等学校36名 (18%)、専門学校26名 (13%)、短期大学22名 (11%)、大学107名 (54%)、大学院4名 (2%) であった。参加者が持つ子どもの平均人数は1.84名 (SD=0.68) であった。子どもの年齢の平均は、4.36歳 (SD=1.08) であった。子どもの性別は、男児が107名 (54%)、女児が90名 (46%) であった。子どもが通う施設の状況としては、保育所65名 (33%)、幼稚園83名 (42%)、認定こども園32名 (16%)、その他17名 (9%) であった。

### 調査時期

クラウドソーシングサービス「クラウドワークス」上にて2023年4月に募集を行い、調査を行った。

### 手続き

Google Forms でアンケートを作成し、クラウドソーシングサービス「クラウドワークス」を用いて2023年4月に参加者の募集を行い、インターネット上で調査を行った。

### 質問紙内容

#### (1) 属性

母親の年齢、最終学歴、就業形態、子どもの人数、子どもの年齢と性別、家族構成、通所施設を尋ねた。3歳から6歳までの子どもが2人以上の場合も考慮し、参加者には、「3歳から6歳までの子どものうち一人の子どもを想像してください」と教示を行い質問に答えてもらった。

#### (2) 子どもの感情調節

Emotion Regulation Checklist (ERC) (Shields, & Cicchetti, 1997) の日本語版を作成した。ERC の開発者 Cicchetti, D. に許可を得て尺度翻訳の手続きマニュアルを送付してもらった。その後、日本語に翻訳し、臨床心理学を専門としている大学院生と臨床心理士及び公認心理師資格を有する教員とで検討を行った。原版と日本語版の同等性を確保するために、翻訳会社に依頼し、完成した日本語訳のバックトランスレーションを行った。そして、翻訳したものとバックトランスレーションしたものの両方を原著者に送り、原版と項目内容が等しいことを承認してもらった。「感情調節」は10項目、「感情の否定性・不

安定性」は14項目から構成され、ERC 原版と同様に2つの下位尺度からなる24項目とした。原版と同様に「まったくない」「ときどきある」「よくある」「ほとんどいつもある」の4件法とした。

### (3) 子どもの強みと問題行動

Sugawara et al (2006) の日本語版 Strength and Difficulties Questionnaire (以下、SDQ) の25項目を尋ねた。子どもの強みと困難さを測定する質問紙であり、下位因子は、それぞれ「情緒的問題」「行為の問題」「多動/不注意」「仲間関係の問題」「向社会的な行動」がある。「あてはまる」「まああてはまる」「あてはまらない」の3件法で尋ねた。

### (4) 子どもの社会的行動

保護者評定による子どもの社会的行動評価尺度(立元他, 2011)は、子どもの様々な問題行動や適応行動を測定する尺度であり31項目からなる。下位因子は、「孤立行動」「ネガティブな行動(衝動的・多動的行動, 攻撃的行動)」「ポジティブな行動(協調的な適応行動, 同輩とのトラブルにおける適切な対応)」の5つがある。頻度を尋ねるものであり、「まったくない」「月に1回以上」「週に1回以上」「週に2・3回以上」「日に1・2回以上」「日に3回以上」「日に5回以上」の7件法であった。

### (5) マインドフルペアレンティング

Interpersonal Mindfulness in Parenting (以下、IM-P) (Duncan et al., 2009) の31項目の日本語版(戸部, 2020)を尋ねた。親の子どもへの接し方について、「決してない」「ほとんどない」「たまにある」「よくある」「いつもある」の5件法で尋ねた。戸部(2020)が再分析中だったため、原版の日本語訳を翻訳者からもらった。原版の下位因子は、「注意深く話を聞く」「自分と子どもの対する非判断的な受け入れ」「子育て関係における自己規制」「自分と子どもの感情的認識」「自分と子どもへの思いやり」の5つからなる。

## 分析方法

質問項目の回答の偏りを確認するために、項目分析では、各項目の平均得点、標準偏差の算出、天井・床効果の確認、項目間相関分析を行った。信頼性の検討では、内的整合性を確認するために、尺度全体および各下位尺度の Cronbach $\alpha$  を算出した。

## 倫理的配慮

調査協力の任意性を確保するために、回答者は、希望すれば途中でであっても回答をやめることができることを記載した。また、回答は暗号化され、特定されないように処理されることを記載した。万が一、回答者に苦痛を与えた場合の相談窓口として、広島大学大学院人間社会科学部倫理委員会の URL を記載した。調査実施者の名前と、指導教員の氏名、そしてクラウドワークス内のメッセージ機能にて調査実施者になんでも問い合わせができる旨を記載した。

本研究では研究段階に収集した情報を統計処理するコンピュータや、そして情報を保存する USB メモリの紛失などによって情報が漏洩するおそれがある。そのため、統計処理をするコンピュータについては、各種ソフトウェアを最新版に更新した。

収集した情報、およびそのデータや処理結果を保存する USB メモリについては、取り扱う情報の重要度を確認した。そして情報が漏洩しないために USB にはパスワードをかけて鍵のかかったロッカーに厳重に保管した。

## 結果

### 分析方法

本研究の分析には HAD ver.17 (清水, 2016) を利用した。

### 各尺度の記述統計量

各尺度の下位尺度の設定は先行研究に従い合計得点を使用し分析した。Table 1では本研究で算出した各尺度の下位尺度の記述統計量を示した。

### 項目分析

日本語版 ERC の尺度について天井効果・床効果の確認を行った。その結果項目1に天井効果が見られた。また、項目10、項目13、項目16、項目18、項目19、項目24に床効果が見られた。しかし、ドイツ版 ERC 作成時にも多くの天井効果・床効果が見られながらこれらの項目を使用していることや、これらの項目が、内容的に測定するためには必要だと考え、除外することなく分析を行った。

### モデルの検討

原版のモデルに従い確認的因子分析を行った。モデル適合度 CFI = .71, RMSEA = .09 で十分な適合度を得られなかったため、探索的因子分析を行った。原版のモデルに基づき、2因子を想定して行い、因子負荷量が .30 よりも低

Table 1 合計尺度得点の記述統計量

変数	平均値	標準偏差	分散	最小値	最大値
感情調節					
感情の否定性・不安定性	26.01	5.94	35.24	14.00	41.00
感情調節	30.89	3.26	10.63	19.00	36.00
問題行動					
情緒の問題	7.84	2.22	4.94	5.00	15.00
行為の問題	7.05	1.79	3.22	5.00	13.00
多動・不注意の問題	8.60	2.50	6.27	5.00	15.00
仲間関係の問題	7.49	1.69	2.85	5.00	12.00
向社会的な行動	12.66	1.98	3.94	8.00	15.00
社会的行動					
ポジティブ行動	35.53	9.90	97.94	15.00	70.00
ネガティブ行動	33.15	13.09	171.25	15.00	76.00
孤立行動	13.61	3.91	15.29	6.00	31.00

Table 2 作成した日本語版 ERC の項目

項目	因子負荷量
<b>F1. 感情の否定性・不安定性 (<math>\alpha = .84</math>)</b>	
20. この子は衝動的である。	.76
8. この子は痲癩を起こしやすい。	.74
13. この子は有り余るほどの活力を持っているため、破壊的な痲癩を起こしやすい。	.70
14. この子は大人による制限に対して、怒って反応する。	.69
6. この子はイライラしやすい。	.68
2. この子の気分は大きく変動する。(例えば、子供の感情状態は、非常にポジティブな感情状態から非常にネガティブな感情状態に素早く移行するため、予想することが困難である)。	.59
22. 他の人が邪魔に思うような高揚感を示す。	.55
11*. この子は感情的になるような状況でも、その興奮を抑えることができる。(例えば、元気いっぱい遊びの場面で「調子に乗った」り、不適切な文脈で過度に興奮したりしない)。	.44
9*. この子は満足を先延ばしすることができる。	.44
17. この子は他の人を遊びに誘おうとするとき、過度にはしゃぐ。	.37
10. この子は他人の苦痛に喜びを感じる(例えば、他人が傷ついたり罰を受けたりすると笑う、他人をからかうのが好きなど)。	.35
12. この子は先生に対して泣き言をいったり、くっついたりする。	.34
<b>F2. 感情調節 (<math>\alpha = .75</math>)</b>	
18*. この子は平坦な感情を示す(例えば、表情が乏しく、無表情である。感情がこもっていないように見える)。	.63
16*. 悲しそう、または元気がないように見える。	.62
5. この子は動揺したり、悩んだりしても、すぐに立ち直ることができる。(例えば、感情を害するような出来事の後でも、不機嫌になったり、不安や悲しみを抱えたままになったりしない)。	.57
24*. この子は他の仲間を遊びに誘おうとするとき、否定的な感情を示す。	.57
19*. この子は仲間からの中立的または好意的な誘いかけに否定的な反応をする(例えば、怒ったような口調で話す、または怒りに任せて攻撃的に反応する)。	.53
7. この子は友達からの中立的または友好的な誘いかけに積極的に応じる。	.51
15. この子は悲しい気分、怒りや腹立ち、恐れや恐怖を感じているとき、それを言うことができる。	.40
3. この子は、大人からの中立的または好意的な誘いかけに積極的に応じる。	.37
1. この子は元気な子です。	.34

\*は逆転項目 (11, 9, 18, 16, 24, 19)

かった3項目を除き、21項目を採用したものをTable 2に示す。探索的因子分析の際、項目5、項目12、項目19、項目24がほかの因子に移動した。モデル適合度は、CFI = .88, RMSEA = .06

の適合度を得た。因子間相関係数は、 $r = -.21$ と弱い負の相関がみられた (Table2)。

#### 内的整合性

内的整合性を検討するために、クロンバック



の  $\alpha$  係数を算出した。感情の否定性・不安定性の  $\alpha$  係数は、.84、感情調節の  $\alpha$  係数は .75であった。

### 構成概念妥当性

構成概念妥当性を検討するために、日本語版 ERC の感情調節・感情の否定性・不安定性と SDQ、保護者評定による子どもの社会的行動評価尺度の下位尺度それぞれとの相関を表に示す (Table 3)。感情の否定性・不安定性は、行為の問題、多動不注意の問題、情緒の問題、向社会行動、ネガティブな行動と正の相関があった。また、感情調節は、向社会行動・ポジティブな行動と正の相関、行為の問題、情緒の問題、仲間関係の問題、孤立行動と負の相関があった。

### その他の検定

年齢の差の検定を行ったが、年齢差による違いは見られなかった。また、性差の検定を行ったが性差による違いも見られなかった。

## 考 察

本研究では、日本語版 ERC を作成し、妥当性・信頼性を検討することを目的として研究を行った。

妥当性の検討として、原版をもとに確認的因子分析を行った。しかし、十分なモデルの適合度は得られなかった (CFI = .71, RMSEA = .09)。そのため、原版に基づき、2 因子想定で探索的因子分析を行った。それでも適合度が低かったため、因子負荷量が .30 よりも低いもの 3 項目を削除し、21 項目のモデルを採用した (CFI = .88, RMSEA = .06)。削除した項目は、項目 4、項目 21、項目 23 である。項目 4 は、「この子はある活動から別の活動への切り替えがうまくできる (例えば、ある活動から別の活動に移るときに、不安や怒り、苦痛を感じたり、過度に興奮することがない。)」であり、イタリア版においても、因子負荷量が .30 よりも小さいという結果になっていた (Molina et al., 2014)。項目 21 については、「この子は他者に対して共感的である。他人が動揺したり、苦しんでいるときに、心配したり悲しんだりする。」であり、因子負荷量が低いという記載は他の国で見られ

なかった。

項目 23 は、「この子は仲間からの敵対的、攻撃的、または乱暴な行為に対して、適切な否定的感情 (例えば、怒り、恐れ、不満、苦痛) をする。」という項目であり、これはイタリア版、スペイン版で因子負荷量が .30 よりも低く (Molina et al., 2014, Lucas-Molina et al., 2022)、先行研究と一致していた。また、ブラジル版では除外されていることから (Reis et al., 2016)、項目 23 は文化に限らず因子負荷量が低いことが推察された。

また、探索的因子分析を行った結果、項目 5、項目 12、項目 19、項目 24 が別の因子に移動した。まず、感情の否定性・不安定性から感情調節の逆転項目に移動した項目は、項目 19 と項目 24 であった。項目 24 に関しては、他の国において前例はなかったが、項目 19 については、ブラジル版と同様の変更がなされていた (Reis et al., 2016)。また、感情の否定性・不安定性の逆転項目から感情調節に移動した項目は項目 5 であり、スペイン版と同様の変更がなされていた (Lucas-Molina et al., 2022)。項目 12 については、原版では分析の際除外されている項目になっていたが、本研究においては、感情の否定性・不安定性に移動した。この変化は、トルコ版、イタリア版においても同様の変更がなされていた (Danisman et al., 2016; Molina et al., 2014)。

このような変化が行われた理由として、翻訳した際、忠実な翻訳を意識した結果、直接的な表現になり伝わりにくい表現になってしまった可能性がある。今後、項目を再検討し伝わりやすい日本語に修正していく必要がある。

内的整合性を検討するためにクロンバックの  $\alpha$  係数を算出した。感情の否定性・不安定性の  $\alpha$  係数は .84、感情調節の  $\alpha$  係数は .75 であった。これらのことから各尺度とも内的整合性は保たれたといえる。

また、因子間相関係数は  $r = -.21$  と弱い負の相関がみられ、3 歳から 6 歳を対象に行われたペルシャ版の  $r = -.49$  (Meybodi et al., 2018) と比べて、低い結果が得られたが、イタリア版の  $r = -.30$  (Molina et al., 2014) にある程度類似し

Table 3 日本語版 ERC とほかの変数との相関係数

	情緒の問題	行為の問題	多動不注意の問題	仲間関係の問題	向社会行動	ポジティブな行動	ネガティブな行動	孤立行動
感情の否定性・不安定性	.26 **	.69 **	.63 **	.26 **	-.40 **	-.28 **	.66 **	.12 +
感情調節	-.36 **	-.26 **	-.13 +	-.53 **	.35 **	.20 **	-.16 *	-.28 **

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , + $p < .10$

ている結果となっており、因子間相関においては、文化間でもばらつきがあるといえる。

構成概念妥当性について検討をした。感情の否定性・不安定性は、行為の問題、多動不注意行動や情緒の問題と正の相関があり、ペルシャ版とブラジル版と一致していた (Meybodi et al, 2018 ; Reis et al., 2016)。また、感情調節は向社会行動と正の相関、行為の問題、情緒の問題と負の相関があり、ペルシャ版とブラジル版と一致していた (Meybodi et al, 2018 ; Reis et al., 2016)。これらの結果から、ある程度構成概念妥当性はあると考えられる。

本研究の限界として、再検査信頼性を測定できていないことが挙げられる。また、原版を忠実に翻訳したため回答者にとって分かりにくい項目を作成してしまったことが挙げられる。

今後の課題として、質問項目を検討しなおし、回答者が理解できるような項目、回答しやすい項目を作成し直すこと、そして再検査信頼性を検討することが必要だと考えられる。

## 引用文献

- Bailey, C. S., Denham, S. A., Curby, T. W., & Bassett, H. H. (2016). Emotional and organizational supports for preschoolers' emotion regulation: Relations with school adjustment. *Emotion (Washington, D.C.)*, **16**(2), 263-279. <https://doi.org/10.1037/a0039772>
- Blandon, A. Y., Calkins, S. D., Grimm, K. J., Keane, S. P., & O'Brien, M. (2010). Testing a developmental cascade model of emotional and social competence and early peer acceptance. *Development and psychopathology*, **22**(4), 737-748. <https://doi.org/10.1017/S0954579410000428>
- Brumariu L. E. (2015). Parent-Child Attachment and Emotion Regulation. *New directions for child and adolescent development*, **2015**(148), 31-45. <https://doi.org/10.1002/cad.20098>
- Cicchetti, D. (1993). Developmental psychopathology: Reactions, reflections, projections. *Developmental Review*, **13**(4), 471-502. <https://doi.org/10.1006/drev.1993.1021>
- Cicchetti, D., Ganiban, J., & Barnett, D. (1991). Contributions from the study of high-risk populations to understanding the development of emotion regulation. In J. Garber & K. A. Dodge (Eds.), *The development of emotion regulation and dysregulation* (pp. 15-48). Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1017/CBO9780511663963.003>
- Cole, P. M., Martin, S. E., & Dennis, T. A. (2004). Emotion regulation as a scientific construct: Methodological challenges and directions for child development research. *Child Development*, **75**(2), 317-333. <https://doi.org/10.1111/j.1467-8624.2004.00673.x>
- Duncan, L. G., Coatsworth, J. D., & Greenberg, M. T. (2009). A model of mindful parenting: implications for parent-child relationships and prevention research. *Clinical Child and Family Psychology Review*, **12**(3), 255-270. <https://doi.org/10.1007/s10567-009-0046-3>
- Eisenberg, N., Spinrad, T. L., & Eggum, N. D. (2010). Emotion-related self-regulation and its relation to children's maladjustment. *Annual review of clinical psychology*, **6**, 495-525. <https://doi.org/10.1146/annurev.clinpsy.121208.131208>
- Harrington, E. M., Trevino, S. D., Lopez, S., & Giuliani, N. R. (2020). Emotion regulation in early childhood: Implications for socioemotional and academic components of school readiness. *Emotion (Washington, D.C.)*, **20**(1), 48-53. <https://doi.org/10.1037/emo0000667>
- 鹿島 なつめ (2020). 幼児期後期の否定的感情制御と養育者の否定的感情への反応, *Child Behavior Checklist (CBCL) による問題行動の縦断的検討. 教育心理学研究*, **68**(3), 266-278.
- Lucas-Molina, B., Giménez-Dasí, M., Quintanilla, L., Górriz-Plumed, A.B., Giménez-García, C., & Sarmiento-Henrique, R. (2022). Spanish validation of the Emotion Regulation Checklist (ERC) in preschool and elementary children: Relationship with emotion knowledge. *Social Development*. <https://doi.org/10.1111/sode.12585>
- Meybodi, F. A., Mohammadkhani, P., Pourshahbaz, A., Dolatshahi, B., Mousavi, M. E., & Heydari, H. (2018). Psychometric properties of the Persian version of the emotion regulation checklist. *Mid East J Fam Med*, **7**(10), 187. <https://doi.org/10.5742/MEWFM.2018.93260>
- Molina, P., Sala, M. N., Zappulla, C., Bonfigliuoli, C., Cavioni, V., Zanetti, M. A., Baiocco, R., Laghi, F., Pallini, S., De Stasio, S., Raccanello, D., &

- Cicchetti, D. (2014). The Emotion Regulation Checklist—Italian translation. Validation of parent and teacher versions. *European Journal of Developmental Psychology*, **11**(5), 624–634. <https://doi.org/10.1080/17405629.2014.898581>
- Nader-Grosbois, N., & Mazzone, S. (2015). Validation de la version francophone de l'Emotion Regulation Checklist (ERC-vf). *Revue Européenne de Psychologie Appliquée*, **65**, 29–41. <https://doi.org/10.1016/j.crap.2014.10.002>.
- Noroña-Zhou, A. N., & Tung, I. (2021). Developmental patterns of emotion regulation in toddlerhood: Examining predictors of change and long-term resilience. *Infant mental health journal*, **42**(1), 5–20. <https://doi.org/10.1002/imhj.21877>
- Shields, A., & Cicchetti, D. (1997). Emotion regulation among school-age children: The development and validation of a new criterion Q-sort scale. *Developmental Psychology*, **33**(6), 906–916. <https://doi.org/10.1037/0012-1649.33.6.906>
- Soydan, S. B., & Akalin, N. (2023). Emotional regulation and aggression in children: The regulatory role of Turkish mothers' emotion socialization reactions. *Family Relations*, **72**(4), 1709–1724. <https://doi.org/10.1111/fare.12785>
- Sugawara, M., Sakai, A., Sugiura, T., Matsumoto, A. (2006). SDQ: The strengths and Difficulties Questionnaire. Retrieved December 13, 2023, from <http://www.sdqinfo.com>
- 立元 真・古川 望子・福島 裕子・永友 絵里 (2011). 保護者評定による子どもの社会的行動評価尺度の作成. 宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要, **19**, 39–47.
- 戸部 浩美 (2020). マインドフルペアレンティングプログラムの開発と効果検証：ランダム化比較試験. 科研費2020年度実績報告書.
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフトHAD：機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 *メディア・情報・コミュニケーション研究*, **1**, 59–73. <https://repository.tku.ac.jp/dspace/handle/11150/10815>
- Trentacosta, C. J., & Izard, C. E. (2007). Kindergarten children's emotion competence as a predictor of their academic competence in first grade. *Emotion (Washington, D.C.)*, **7**(1), 77–88. <https://doi.org/10.1037/1528-3542.7.1.77>
- 吉津 潤・関口 理久子・雨宮 俊彦 (2013). 感情調節尺度（感情調節アンケート）日本語版の作成. *感情心理学研究*, **20**(2), 56–62.
- Zeman, J., Cassano, M., Perry-Parrish, C., & Stegall, S. (2006). Emotion regulation in children and adolescents. *Journal of developmental and behavioral pediatrics : JDBP*, **27**(2), 155–168. <https://doi.org/10.1097/00004703-200604000-00014>